

元曉の三昧と懺悔観

金 貞 男

〔抄 録〕

本稿は元曉(617～686)の『大乘六情懺悔』が三昧を通じた懺悔法であり、具体的に悟りを通じた懺悔であることを考察した。

ところで、『大乘六情懺悔』に関する既存の研究をみると、その視点が罪業を持つ存在としての衆生の立場から仏という対象を捉えていく論証が多い。

本稿は『大乘六情懺悔』が元曉の著述の中で、特に『金剛三昧経論』との関連性に注目した。本稿の範囲は元曉の三昧と懺悔であり、『大乘六情懺悔』と『金剛三昧経論』の三昧と懺悔観を比較した。このような考察は元曉の実践の特徴の一面を明らかにすることにその意義がある。

まず三昧観としては、元曉は『大乘六情懺悔』において三昧の実践として如夢観と如夢三昧を挙げている。特に『金剛三昧経論』によれば、金剛とはその三昧が持つ効用性の意味であり、大乘観は三慧観として述べられている。また存三守一の状態はついに無生忍の境地に至る。このような大乘観は『大乘六情懺悔』の如夢三昧が無生忍に至るのと同じである。もっと具体的にいえば、『大乘六情懺悔』と『金剛三昧経論』の三昧観は無生観である。またそのような無生観は『大乘六情懺悔』には六情の放逸に対する懺悔として現れており、『金剛三昧経論』には金剛三昧に入れば、その定によって罪業が減すると述べている。つまり、三昧による悟りの懺悔は三昧と懺悔が同じ悟りの現れとして作用するのである。つまり、元曉はこのように、三昧と罪業、三昧と悟り、悟りと罪業の関係を『大乘六情懺悔』において現そうとしている。

キーワード 元曉、『大乘六情懺悔』、『金剛三昧経論』、無生懺、無生観

1. 問題の所在

本稿は元曉(617～686)の『大乘六情懺悔』⁽¹⁾の実践的特徴を大きく三昧と懺悔の観点から探してみる。

ところで、『大乘六情懺悔』に関する既存の研究をみると、その論証の視点が罪業を持つ存在

としての衆生の立場から仏という対象を捉えていく例が多い。⁽²⁾

本稿は『大乘六情懺悔』が元曉の著述の中で、特に『金剛三昧經論』⁽³⁾との関連性に注目する。

本稿の範囲は元曉の三昧と懺悔であり、『大乘六情懺悔』と『金剛三昧經論』との三昧と懺悔観の比較である。これを通じて、元曉の実践の特徴の一面を明らかにすることにその意義があると考えられる。

このような面をふまえて、本稿では『大乘六情懺悔』の実践的特徴を『金剛三昧經論』の三昧と懺悔観と関連つけて考察する。

2. 元曉の三昧観

元曉の『大乘六情懺悔』が三昧を通じた懺悔であることを如夢観と如夢三昧の例を挙げて考察する。つまり、元曉は『大乘六情懺悔』において三昧の実践として如夢観と如夢三昧を挙げている。すなわち、

我及衆生。唯寢長夢妄計謂為実。違順六塵男女二相。並是我夢。永無実事。何所憂喜何所貪瞋。数数思惟。如是夢観。漸漸修得如夢三昧。由此三昧得無生忍。從於長夢豁然而覺。即知本来永無流轉。但是一心一如床。⁽⁴⁾

と言っている。『大乘六情懺悔』に現われている三昧は具体的に如夢観、如夢三昧、無生忍、一心と言えよう。このような悟りの構造は『金剛三昧經論』にもみられる。例えば、『金剛三昧經論』には悟りの構造を一味観行として述べている。すなわち、

此經宗要有開有合。合而言之。一味観行為要。開而說之。十重法門為宗。⁽⁵⁾

と言っている。ここでいう一味観行は三昧を現わしている言葉である。では、一味観行と三昧の関係をみてみたい。例えば、

無生之行冥會無相。無相之法順成本利。利既是本利而無得故不動實際。際既是實際而離性故實際亦空。諸仏如来於焉而藏。一切菩薩於中隨入。如是名為入如来藏。是為六品之大意也。於此観門。從初信解乃至等覺。立為六行。六行滿時。九識転頭無垢識為浄法界。転餘八識而成四智。五法既円三身斯備。如是因果不離境智。境智無二。唯是一味。如是一味観行以為此經宗也。所以大乘法相無所不攝。無量義宗莫不入之。⁽⁶⁾

と言っている。ここでは、一味観行は無生の行と無相の法といい、その行によって、如来蔵に入ることを意味する。このような境地は大乘法相を撰しないことがないし、無量義宗が入られないことがないという。そこで一味観行と三昧の関係を分ったので、金剛三昧はすなわち、

金剛三昧當知亦爾。實際為体破穿為能。實際為体者証理窮源故。如下文言証法真實定故。破穿為能者有其二義。一破諸疑二穿諸定。破諸疑者起說斷疑故。如下文悟言決定斷疑悔故。穿諸定者。此定能令諸餘三昧皆得有用。如穿宝珠。⁽⁷⁾

と言っている。金剛三昧はすべての疑悔を断じ、この定は諸餘三昧を有用させるから、その効用が宝珠を穿るようである。金剛三昧のもう一つの特徴は定の作用を現象的な用語として現している。すなわち、

是故當知不住境簡別定散差別之相。何以故。捷疾之弁雖速移轉而有定故。遲鈍之念雖久住境而是散故。今此金剛三昧名為正思察者。無正不正。亡思非思。但為別於分別邪念。又不同於虛空無思。所以強號正思耳。⁽⁸⁾

と言っている。ここでいう「無正不正」、「亡思非思」といい、「虛空無思」と分別するために「正思」というのがその定の作用である。また『金剛三昧經論』は大乗観に根拠した三昧であるといえる。

さて、『金剛三昧經論』の大乗観はどのように現われているのだろうか。特に『金剛三昧經論』の大乗観は三慧観として述べられている。『金剛三昧經論』の大乗観については、すなわち、

案云。八解脱觀略有二門。若就事相唯修慧觀。是空二乘。如余處說。若就三慧觀人法空。是大乘觀。・・・如是三慧觀人法空。伏離二執現行二縛故名解脱⁽⁹⁾

と言っている。ここでいう大乗観は三慧観人法空である。このように『金剛三昧經論』の大乗観は解脱の境地をいうから三昧と関連づけられる。その解脱の境地は存三守一として述べられている。存三の境地はすなわち、

心事不二是名存用者。是名存三之用勝能。若人未得存三之用。靜心觀空涉事失念。取我我所着違順境。天風所動心事名異。若能熟修三解脱者。出觀涉事觀勢猶存不取我他之相。不着好惡之境。由是不為天風所鼓。入出同志心事不二。如是乃名存三之用也。是觀始修在十信位。存用得成、在十住位。⁽¹⁰⁾

と言っている。つまり、心事不二を得ることである。心事不二がなぜ三昧になるのかは、入定

と出定に関わらず、心事不二の状態であるからである。また守一の境地はすなわち、

此中守者。入時静守一如之境。出時不失一味之心。故言守一。・・・案云。三時不失中道一味即是此觀守一之用。此觀在於十行位也。⁽¹¹⁾

と言っている。常に中道一味の状態であることをいう。つまりこのような三昧法によって、ついに無生忍を得られる。『金剛三昧経論』において無生忍であると述べているところは次のようである。すなわち、

于時証會本來空寂故言本生不生心常空寂。如是空寂能所平等。無能住心住於空境。故言空寂無住。如是乃名無生法忍。⁽¹²⁾

と言っている。つまり無生忍は空寂無住であるといい、能取心と所取相がすべてなくなった本来の空寂な状態をいうのである。他に無生忍については、無住と無生の関係として現われている。すなわち、

若心無住於無生境離諸分別。是無生忍。故知有住非無生忍⁽¹³⁾

と言っている。つまり、無生忍の境地はすべての分別がなくなる。さらに、

無生法忍者。達法本無生。是即定慧諸行亦無有生。非於無生。有能忍行。⁽¹⁴⁾

と言っている。無生法忍とは無住の境地をいい、無生の法に基づいている。

つまり地前凡夫がその対象になる。すなわち、

経曰爾時衆中間説此已皆得無生無住般若。論曰此是第三時衆得益。地前凡夫聞説此品能得初地無生忍故⁽¹⁵⁾

と言っている。特に『金剛三昧経論』「本覚利品」には無生忍を大夢から目覚めた姿として譬えられている。すなわち、

論曰。一切有情無視始以來入無明長夜作妄想大夢。菩薩修觀獲無生時。通達衆生本來寂靜直是本覺。臥一如床以是本利利益衆生。⁽¹⁶⁾

と言っている。衆生の本来の姿は寂静であり、それは無生觀を通じて現われるという。こうしてみると、『金剛三昧經論』における三昧は無生と無住による三昧であることが知られる。このような部分は『大乘六情懺悔』にも如夢三昧による無生忍の懺悔として現れている。すなわち、

数数思惟。如是夢觀、漸漸修得如夢三昧。由此三昧、得無生忍、從於長夢豁然而覺、即知本來永無流轉、但是一心一如床。若離能如是、數數思惟、雖緣六塵、不以為實、煩惱羞愧、不能自逸。是名大乘六情懺悔。⁽¹⁷⁾

と言っている。無生忍は本来の一心に至った境地であり、その境地は六塵、煩惱の境界がなくなった境地である。また懺悔も三昧と同一な境地になる。つまり、悟りと三昧と懺悔はすべて一心の無生と無住として現われている。

以上を通じてみると、『大乘六情懺悔』と『金剛三昧經論』の三昧觀は無生觀であるのがわかる。

3. 元曉の懺悔觀

さて、衆生が犯した罪業はどんなことであるとみななければならないだろうか。衆生には実体があると思われる。しかし、覺者には虚空と同じであり、むしろ衆生の罪業は覺者においては妙用になる。衆生が一心を悟ったら、その以後には一心から衆生心を起こるのが却って難しいのである。なぜならば一心そのままが衆生心になるし、衆生心そのままが一心の妙用になるからである。このような一心の妙用は仏の存在と同一視され、常に衆生の歸依処になる。従って元曉は『大乘六情懺悔』において、そのような一心への歸命を通じた懺悔を述べている。つまり、衆生に対する慈悲の現われであるといえる。すなわち、

歸命十方無量諸仏。諸仏不異而亦非一。一即一切一切即一。雖無所住而無不住。雖無所為而無不為。一一相好一一毛孔。遍無境界尽未來際。無障無礙無有差別。教化衆生無有休息。所以者何。十方三世一塵一念。生死涅槃無二無別。大悲般若不取不捨。以得不共法相應故。……今於此處蓮華藏界。廬舍那仏坐蓮華臺。放無邊光。集無量衆生。轉無所轉大乘法輪。菩薩大衆遍滿虚空。受無所受大乘法樂。⁽¹⁸⁾

と言っている。元曉は『大乘六情懺悔』において、諸仏は不可思議な大乘法輪を現わし、大乘法樂を共にする存在として述べている。このような諸仏の存在と関連づけ、衆生の罪業はどのように現われているのだろうか。

『大乘六情懺悔』には罪業の本性が本来ないことを述べている。すなわち、諸罪は實際にな

いし、衆縁の和合によって業になるという。またその業は実際はないという。すなわち、

衆縁和合假名為業。即縁無業離縁亦無。非内非外不在中間。過去已滅。未來未生現在無住。故所作以其無住故亦無生。・・・當知業性本來無生。從本以來不得有生。當於何處得有無生。有生無生俱不可得。言不可得亦不可得。業性如是諸仏亦爾。如經說言。譬如衆生造作諸業。若善若惡非内非外。如是業性非有非無。亦復如是。⁽¹⁹⁾

と言っている。つまり、罪業の本性を無生と無住の観点から捉えている。

ところで、先述のような罪業の本性を述べながらも、改めて懺悔の重要性を述べている。すなわち、

如其放逸無懺無愧。不能思惟實相者。雖無罪性將入泥梨。猶如幻虎還吞幻師。是故當於十方仏前。深生慙愧而作懺悔。⁽²⁰⁾

と言っている。つまり、実相観と実相懺悔に至らない場合には本来衆生の罪性がないというが、その放逸を懺悔しなければならないという。すなわち、

我及衆生無始已來。不解諸法本來無生。妄想顛倒計我我所。内立六情依而生識。外作六塵執為實有。不知皆是自心所作。如幻如夢永無所有。於中橫計男女等相。起諸煩惱自以纏縛。長没苦海不求出要。靜慮之時甚可怪哉。⁽²¹⁾

と言っている。衆生が諸法の本来無生を忘れ、六塵の作用に顛倒されている姿を述べている。つまり元曉は『大乘六情懺悔』において、実相懺悔の重要性を述べている。そのような実相懺悔は実相観と相通じている。すなわち、

作是悔時莫以為作。即思惟懺悔實相所悔之罪既無所有。云何得有能懺悔者。能悔所悔皆不可得。當於何處得有悔法於諸業障作是悔已。⁽²²⁾

と言っている。つまり、実相の世界はすべての実体がないから、無生であり、またその実相から現わす世界は無住である。このような『大乘六情懺悔』の懺悔思想は元曉の著述の中でも主に『金剛三昧経論』と関連づけられる。『大乘六情懺悔』において罪業の本性を論じた部分と『金剛三昧経論』の一心の根源を論じた部分の論理の展開が類似しているのもそのような理由である。『金剛三昧経論』の三昧と罪業の関係は次のようである。すなわち、

善男子令諸衆生持是經者心常在定不失本心若失本心即當懺悔懺悔之法是為清涼。⁽²³⁾

と言っている。つまり、すべての衆生はこの經によって常に心を定において本心を忘れてはいけない。若し本心を忘れれば即ち懺悔しなければならないと言っている。また金剛三昧は地前相以真觀ともいい、すべての妄想境界を破し、一時に罪業がなくなるという。また金剛三昧の境地に入れば、當生に淨土に生まれ、阿耨多羅三藐三菩提に至るといふ。すなわち、

經曰・・・依此經教入真實觀一入觀時諸罪悉滅離諸惡趣當生淨土速成阿耨多羅三藐三菩提。論曰此是第二懺悔行法。答中有二。先明行法。後示勝利。初中言依此經教入真實觀者。謂依金剛三昧教旨破諸法相名入真實。此是地前相以真觀。一入觀時諸罪悉滅者。一切罪障從妄想生。今破諸相入真實觀。頓破一切妄想境界。所以諸罪一時悉滅。次顯勝利即有二句。離諸惡趣當生淨土者。是明華報。速成阿耨多羅三藐三菩提者。是示果報。⁽²⁴⁾

と言っている。特に三昧と罪業、悟りと三昧、三昧と懺悔の關係を次のように述べている。すなわち、

經曰阿難言懺悔先罪不入於過去也。仏言如是猶如暗室若遇明燈暗即滅矣。善男子無說悔先所有諸罪而以為說入於過去・・・論曰・・・且今懺悔。能治生時令彼罪種不流現在。如燈生時室暗方滅。罪種不至於今現故。⁽²⁵⁾

と言っている。つまり『金剛三昧經論』における三昧と罪業、三昧と悟り、悟りと罪業の關係は暗い室に燈を明かすとき、すべての闇がなくなる状態として譬えられている。この經によりて真實觀に入ればそのとき、すべての罪業が滅するという。すなわち、一切罪障は妄想より生じるから、金剛三昧に入るといふことは、すべての罪障がなくなるということでもある。つまり無生觀と無生懺は相通じている。

4. 結び

以上、元曉の三昧と懺悔觀を『大乘六情懺悔』と『金剛三昧經論』の三昧と懺悔の觀點から探ってみた。

まず三昧觀としては、元曉は『大乘六情懺悔』において三昧の實踐として如夢觀と如夢三昧を挙げている。特に『金剛三昧經論』によれば、金剛の意味はその三昧の持つ効用性の表現であり、またそのような大乘觀は三慧觀人法空として述べられている。また存三守一の状態はついに無生忍の境地に至る。このような大乘觀は『大乘六情懺悔』の觀法と同じである。つまり、

如夢三昧が無生忍に至るのと同じである。もっと具体的にいえば、『大乘六情懺悔』と『金剛三昧経論』の三昧観は無生観である。またそのような無生観は『大乘六情懺悔』には六情の放逸に対する懺悔として現れている。また懺悔する時は、専ら懺悔の実相を思惟することを述べている。特に『金剛三昧経論』には金剛三昧に入れば、その定によって罪業が減すると述べている。つまり、三昧による悟りの懺悔は三昧と懺悔が同じ悟りの現れとして作用するのである。つまるところに言えば、元暁はこのような懺悔の実践を『大乘六情懺悔』において現そうとしている。

〔注〕

- (1) 『大乘六情懺悔』の資料的根拠は次のとおりである。

『大乘六情懺悔』が経録に始にみえるのは『高山寺聖教目録』(1633)である。(『昭和法宝総目録』巻3、p915中)その以前に凝然(1240～1321)が編集した『華嚴宗経論章疏目録』に「六根懺悔法」として記録されている。現存しているものとしては日本京都の東寺宝菩提院の蔵本である鎌倉時代(1192～1333)の写本として推定されているのを、『大正新修大蔵経』巻45及び『韓国仏教全書』等に『大乘六情懺悔』であると載せられている。(金柄煥「元暁の大乘六情懺悔研究」東国大学大学院、1987)

ところで、日本の凝然の『華嚴宗経論章疏目録』において、元暁の『大乘六情懺悔』を「六根懺悔法」として名づけたのは元暁の思想と少し異なるのではないかと考えられる。なぜならば『大乘六情懺悔』において、元暁が名づけた「大乘」という意味はとても重要な思想的立場を示しているからである。特に『金剛三昧経論』における「大乘」の意味は次のようである。即ち、
 経曰若無思慮即無生滅如實不起諸識安寂流注不生得五法淨是謂大乘。論曰……若無思慮者。始從初地乃至佛地。漸順一心平等法界。永無一切思慮分別故。即無生滅者。由前思慮有生滅相。今無思慮永無分別。二種生滅究竟離故。從此已去順理不動。窮未來際不復還動。故言如實不起。二種生滅究竟息時。八種識動魅皆得歸靜。六染流注永滅不起。故言諸識安寂流注不生。流注不生故法界円顯。諸識安寂故四智満成。故言得五法淨。運載之功莫過於此故。總結言是謂大乘(『金剛三昧経論』、T34、970a～b)と言っている。従って凝然の「六根懺悔法」という題目は元暁の思想的面からみれば異なっている。

- (2) 『大乘六情懺悔』に関する既存の研究は次のようである。

木村清孝氏は『『大乘六情懺悔』の基礎的研究』において、『大乘六情懺悔』の本文を詳細に注釈し、撰者と思想的性格まで明らかにしている。忽滑谷快天氏は『朝鮮禪教史』の中において、元暁の思想を整理しながら、『大乘六情懺悔』の内容中「諸仏が一体無二」という文章を引用し、元暁の中心思想である一乗円教に関連づけている。李箕永氏は『中国古代仏教と新羅仏教』において、元暁の『大乘六情懺悔』の全文を提示し、梁武帝の『慈悲道場懺法』と比較しながら、元暁の懺悔は事懺に対する理懺であり、無罪相莊嚴懺悔の一種であると言っている。箕舜日氏は「大乘六情懺悔考」において、『大乘六情懺悔』の構造的特徴と懺悔思想が持っている本質について論じている。金

柄煥氏は「元曉の懺悔思想—大乘六情懺悔を中心として—」において、元曉の著書である『大乘起信論疏』及び『金剛三昧經論』等に根拠して本文の構成と懺悔の内容を述べている。先述の資料を挙げれば次のとおりである。

忽滑谷快天『朝鮮禪教史』、春秋社、1930

李箕永「中国古代仏教と新羅仏教—元曉の仏教理解を中心として—」韓国精神文化研究院報告論叢80-1、1981

木村清孝『韓国仏教学SEMINAR』第1号、民族社、1985

鄭舜日「大乘六情懺悔考」『元曉聖師の哲学世界』、民族社、1989

鄭舜日「懺悔の本質は何か—大乘六情懺悔考—」、『民族仏教』第2号、青年社、1991

金炳煥「元曉の懺悔思想—大乘六情懺悔を中心として—」『韓国仏教学』第16輯、韓国仏教学会、1991

- (3) 『金剛三昧經論』に関する既存の研究は次のとおりである。諸説の中、本稿は柳田聖山氏の説に従う。つまり柳田聖山氏は「金剛三昧經の研究」において、水野弘元説に対して反論を提起している。達摩の二入四行説によって『金剛三昧經』が成立されたのではなく、逆に『金剛三昧經』によって二入四行説が成立されたと論じている。また『金剛三昧經』の撰述処も中国より韓半島であり、新羅仏教人によって撰述されてあろうと述べている。既存の研究の一例を挙げれば次のとおりである。

小野玄妙「元曉の金剛三昧經論」『新仏教』11-6、1911

水野弘元「菩提達磨の二入四行説と金剛三昧經」『駒沢大学研究紀要』13、1955年／「菩提達磨の二入四行説と金剛三昧經」『印度学仏教学研究』6、1955

千明東道「金剛三昧經論の一考察—五義説を中心として—」『印度学仏教学研究』31-2、1983

柳田聖山「金剛三昧經の研究」『白蓮仏教論集』巻3、1993

高翊善「元曉思想の實踐原理—金剛三昧經論の一味観行を中心として—」『韓国仏教思想史』崇山朴規吉真博士華甲紀年会、円光大学校出版局、1981

韓普光「韓半島で作られた疑偽經について」『印度学仏教学研究』45-1、1996

金英泰『仏教学報』25輯、東国大学

佐藤繁樹「元曉における和諍の論理—金剛三昧經論を中心として—」東国大学校博士学位論文、1993／「元曉における悟りとは何か」弥天陸楨培博士恩法学人会、1997

佐藤繁樹「元曉の『金剛三昧經論』に於ける論理構造の特色—無二而不守一思想—」『印度学仏教学研究』42-2、1994／李曉箕（佐藤繁樹）「心源の系譜—元曉の核心思想—」『印度学仏教学研究』50-2、2002

石井公成「金剛三昧經の成立事情」『印度学仏教学研究』46-2、1998

福士慈稔『新羅元曉研究』平文社、2004

- (4) 『大乘六情懺悔』、T45、922b
(5) 『金剛三昧經論』 T34、p961a
(6) 『金剛三昧經論』 T34、p961 a ~b
(7) 『金剛三昧經論』 T34、p961c
(8) 『金剛三昧經論』 T34、p962b

- (9) 『金剛三昧經論』 T34、p987c～988a
- (10) 『金剛三昧經論』 T34、p988 a～b
- (11) 『金剛三昧經論』 T34、p987c
- (12) 『金剛三昧經論』、T34、967b～c
- (13) 『金剛三昧經論』 T34、p967 b
- (14) 『金剛三昧經論』 T34、p973c
- (15) 『金剛三昧經論』 T34、p977 a
- (16) 『金剛三昧經論』、T34、977a～b
- (17) 『大乘六情懺悔』、T45、922b
- (18) 『大乘六情懺悔』、T45、921c
- (19) 『大乘六情懺悔』、T45、921c922a
- (20) 『大乘六情懺悔』、T45、922a
- (21) 『大乘六情懺悔』、T45、922a
- (22) 『大乘六情懺悔』、T45、922a
- (23) 『金剛三昧經論』、T34、1007b
- (24) 『金剛三昧經論』、T34、1007c
- (25) 『金剛三昧經論』、T34、1007b～c

(きむ じょんなん 佛教大学研究員)

(指導：福原 隆善 教授)

2005年10月19日受理